

メッセージアウトライン 創世記22:1～19「最大の試練」

[1-2]「これらの出来事の後、神がアブラハムを試練にあわせられた。神が彼に『アブラハムよ』と呼びかけられると、彼は『はい、ここにおります』と答えた。神は仰せられた。『あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、私があるに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。』」

長い年月の間に受けた多くの試練の後に、アブラハムはさらにもう一つの決定的な試練を受けなければならなかった。神の呼びかけがアブラハムにあった。これは3節から見て夜の幻の中で語られたものと思われる。→創世記15:1参照 「モリヤの地」後にソロモンが神殿を建てるエルサレムの丘の名。→Ⅱ歴代誌3:1 またその周辺の山地。「全焼のいけにえ」牛、または羊の全部を焼いてささげる。これは自分自身を全く神にささげる献身を意味するものであった。ここで神はアブラハムに牛や羊ではなく、彼の愛するひとり子イサクをささげよと言われたのである。これは人間的に考えると理解できないことである。神は長い年月の後に、年を取ったアブラハムと妻サラの間に超自然的にイサクを与えられた。

イサクは神の約束によって与えられたのであり、アブラハム百歳、サラ九十歳の時の誕生である。そしてこのイサクから子孫が増え広がっていき、祝福されることを神がアブラハムに告げられ、契約を結ばれたのであった。→創世記17:1~8,16~21,21:1~3 ところが今、神はそれと矛盾するようなことを言われる。イサクが死んだら、その子孫が増え広がるという約束はどうなるのか。それは殺人であり、善なる神、正義の神がなぜそんなことを命じられるのか。……アブラハムはこのようなことを考えることができただろう。アブラハムは一晩中悶々として神に向かって、なぜ、どうしてと叫び続けたのではないだろうか。しかし、神からの答えはない。

[3-4]「翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、二人の若い者と一緒に息子イサクを連れて行った。アブラハムは全焼のささげ物のために薪を割った。こうして彼は、神がお告げになった場所に向かって行った。三日目に、アブラハムが目を上げると、遠くの方にその場所が見えた」

アブラハムは翌朝早く行動に移った。彼は神の命令を拒否することなく、信仰を持って神に従う方を選び取ったのである。この時、アブラハムはベエル・シェバの地に滞在していた。この地は死海の西方約20kmのヘブロンから南西に約40kmの地である。「その場所」モリヤの地、後のエルサレムである。ベエル・シェバから北東に約80kmの地。ここに至る道は山道であり、しかも真っすぐではないので三日という時間がかかったのであろう。

[5]「それで、アブラハムは若い者たちに、『おまえたちは、ろばと一緒に、ここに残っ

ていなさい。私と息子はあそこに行き、礼拝をして、おまえたちのところに戻ってくる』
と言った」

ここでは、アブラハムとイサクと二人で行って、アブラハムだけ戻ってくるというのではなく、二人で行って、そして二人で戻ってくるということをアブラハムは言っている。つまり、アブラハムはこのような事態になっても神とその約束を信じ続けたのである。その約束とは神が自分の息子イサクと契約を立て、その子孫を祝福し、空の星のように増え広がるという約束である。→15:4~6,17:21

そして神がイサクをささげよと言われるからには、神は必ず何らかの方法でイサクを死からよみがえらせて、また自分のもとに帰してくださるに違いない。アブラハムはこのように信じた。それゆえ、彼は「わたしと息子は……戻ってくる」と言ったのである。ここにはアブラハムの心からの神への信頼、人格的な神への信頼が見える。神は必ず約束してくださったことを成し遂げてくださる。自分にとって悪いことを決してなさらないという信仰を彼は持っている。これは盲目的な信仰ではなく、人格と人格のふれあいをとおしてはっきりと神というお方を知るようになったがゆえの心からの信頼である。
→ヘブル11:17~19

[6-7]「アブラハムは全焼のささげ物のための薪を取り、それを息子イサクに背負わせ、火と刃物を手に取った。二人は一緒に進んで行った」(6) その途中でイサクは父に「火と薪はありますが、全焼のささげ物にする羊は、どこにいるのですか」(7)と尋ねた。いけにえの羊のことは初めからイサクの心にかかっていたのであろう。しかし、それを簡単に口に出すことを許さない厳粛なものが二人の中にあった。

[8]「アブラハムは答えた。『わが子よ。神ご自身が、全焼のささげ物の羊を備えてくださるのだ。』こうして二人は一緒に進んで行った」

アブラハムは、そこに羊が用意されているということを考えていたのではないだろう。しかし、彼は神の導きに一步一步従うこと以外に方法はない。そしてアブラハムの答えはイサクにとっては反問を許さない権威をもつものであった。重苦しい沈黙が再び始まった。

[9]「…アブラハムは、そこに祭壇を築いて薪を並べた」手ごろな大きさに石を積み重ねてそれを作ったのだらう。「そして息子イサクを縛り、彼を祭壇の上の薪の上に載せた」これは明らかに父子合意の上のことであっただらう。アブラハムの信仰の従順の行為はイサクの父への従順を条件にしてのみ成り立つことである。この時イサクはもう青年になっていたと思われる。それゆえ、その気になれば父のすることに十分抵抗することはできたであらう。しかし、彼が抵抗したという形跡はない。彼の心中には大きな戦いがあったと思われるが、ただ父への人間的な従順だけではなく、神の力強い働きかけがあったのではないだろうか。それゆえ、彼は抵抗せず身をゆだねることができたのではないか。アブラハムの信仰もすばらしいが、イサクの信仰も立派である。神の約束の子として生まれ、神の祝福の中で育てられてきた結果の従順と信仰をここに見ることがで

きる。

[10-13]「アブラハムは手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした」(10) もはやこの時点でアブラハムは躊躇することなく、刃物に手を伸ばして一気にイサクを手にかけてやうとした。「そのとき、主の使いが天から彼に呼びかけられた。『アブラハム、アブラハム。彼は答えた。『はいここにおります。』』」

(11) ここで神が介入された。「御使いは言われた。『その子に手を下してはならない。その子に何もしてはならない。今わたしは、あなたが神を恐れていることがよく分かった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しむことがなかった』」(12)「神を恐れる」とは神の言うことを聞かないと罰せられるから、怖いからという恐れではなく、これは神をかしこんでそのみこころを行うこと、つまり神に従順に従うということが強調されていることばである。人間的な側面から見れば、アブラハムの従順がイサクを救ったということが出来るかもしれない。彼は口先だけ、形だけでなくイサクに手を下して神の命じられたことを完全に実行しようとした。彼は神の約束は人の死にさえ妨げられないということ信じ、神の最善信じ、彼の知識も常識もすべてが理屈に合わない、理不尽だ、愚かだと抵抗する中で神に従うことを選び取ったのである。そして神はそれを良しとしてアブラハムに声をかけられ、止められた。彼はこの最大の試練を乗り越えることができたのである。

「見よ、一匹の雄羊が角を藪に引っかけていた」(13) これはそれ以前に角を藪に引っかけて、しばらく

もがいていた雄羊が疲れて静かにしていたためアブラハムは気がつかず、やがて雄羊が再び動き出したので彼の目に留まったと考えることができる。神は最善のタイミングで必要なものを備えてくださるのである。それでアブラハムはイサクの代わりにその雄羊を取って全焼のいけにえとして献げたのである。

[14]「アドナイ・イルエ」…主が備えてくださるの意。「今日も、『主の山には備えがある』と言われていた」創世記筆者の時代にはこれが一種の格言のようになって伝えられていたのであろう。

[15-18]「……確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の門を勝ち取る。あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたが、わたしの声に聞き従ったからである」

これは新しい約束というよりも、今までに与えられた約束が決して変わらないということの確認であり、それを改めて保証するための主のことばである。主なる神に聞き従うことこそが豊かな祝福への道なのである。

[19]「アブラハムは若い者たちのところに戻った。彼らは立って、一緒にベエル・シェバに行った。こうしてアブラハムはベエル・シェバに住んだ」

アブラハムは最愛のひとり子イサクを献げよと言われた神の最大の試練を通り抜けた。

以前の人間の知恵に頼ってうまく困難をすり抜けようとする思いは消え、徹頭徹尾、主なる神に聞き従い、そのみことばを実行しようとした。神がイサクとその子孫を祝福してくださるとの約束を信じて、たといイサクをいけにえとして献げても神が何らかの方法でイサクを生き返らせて返してくださるとの信仰を持って彼は神に従った。その彼の信仰、彼のひとり子さえ惜しまない神への従順を神は良しと認められた。そして、神はちゃんと雄羊をもそこに用意してくださった。主の山の上に信仰と従順をもって上る者は、主が必ず必要を備えてくださるのである。

それにしても最愛のひとり子を献げよとは、神はなんということを言われるお方かと考えるかもしれないが、実は神はそれと同じことを私たちのためにしてくださったのである。

神はそのひとり子を人としてこの世に送り、私たちの罪の贖いのために十字架につけて死なせられた。イサクは死ななかったが、イエスは確かに死なれた。ここに私たちははっきりと神の愛を見ることができる。神は人間に苦しいことばかり要求して、天から高みの見物をされているようなお方ではない。私たちの救いのために人となってこの罪に汚れた世界に来てくださり、身代わりとなって死なれたほどに私たちを愛してくださるお方である。アブラハムが心から信仰を持って神に従い続けたように、私たちも私たちが愛してくださる神に心から、信仰を持って、また私たちに与えられているみことばの約束を堅く握って従い続ける者になりたい。→ヨハネ3:16、Iヨハネ4:9~10